

開催のごあいさつ

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センターと立命館大学加藤周一現代思想研究センターとは、2017年12月に研究提携協定を締結しました。この協定にもとづいて、これまで毎年両研究センターによる共同展示を企画し、双方の大学キャンパスとウェブ上で同時に公開してまいりました。これは、両センターが保有する資料を利用した企画として立案し、研究成果として学生や市民に公開し、社会に還元することを目的としてきたものであります。

この共同展示の第1回は「君たちはこれからどう生きるか：丸山眞男と加藤周一から学ぶ」(2018年)、第2回は「〈おしゃべり〉からはじまる民主主義」(2019年)、第3回は「人を人と成せし者は映画：加藤も丸山も映画大好き！」(2020年)と題して公開しました。

今回は、丸山眞男と加藤周一の知的成長を跡づける2年連続の企画の後半部分にあたります。この企画は、丸山と加藤の出生から1945年までを対象として、二人が知識人として自己を形成した過程を明らかにしようとするものです。前半部分となる昨年の展示は、「知識人の自己形成：丸山眞男と加藤周一の出生から敗戦まで」と題し、二人が生まれ育った時代、家庭環境、友人や教師、読書、趣味などを包括的・時系列的に紹介しました。今回の展示は、同時代の同じ出来事が丸山と加藤にそれぞれどのような影響を与え、それを二人がどのように受け止め、そこから何を引き出したかということをテーマとしています。こうした構成により、同じ出来事を軸として二人を比較対照することを試みました。

最初に取り上げるのは、1923(大正12)年に発生した関東大震災です。この震災によって

二人が住んだ東京が焦土となったことは、ひきつづいて発生した朝鮮人虐殺事件や甘粕事件などと合わせて、大きな衝撃をもたらしました。その後、東京はモダン都市空間として再生しますが、1931(昭和 6)年の満洲事変を機に、日本は十五年戦争と呼ばれる時代に突入していきます。今回の展示では、軍部の台頭を加速させた 1936(昭和 11)年の二・二六事件と、1941(昭和 16)年の太平洋戦争開戦を中心として、丸山と加藤の反応を紹介します。そして最後に、二人が敗戦の体験をどう意味づけていったかを扱います。

丸山と加藤の体験は一回限りのものであり、現代に生きる私たちがそのまま再現できるわけではありません。しかし、同じ出来事に直面しても、二人の間の年齢や関心の違いによって、それぞれの受け止め方は異なるものとなりました。そしてそれがかかわらず、両者は知識人としての特質を共有しています。このことは、さまざま異なる体験からも共通の意味を引き出しうることで、丸山と加藤が経験したような知的成長は決して特定の時代においてのみ可能になったわけではないことを示しています。丸山と加藤が知識人として自己を形成していった過程を明らかにしようとする本展示が、知性の成長という事柄に関して考える一助となれば幸いです。

なお、今回は昨今のコロナ禍を考慮してウェブ上の展示を中心とし、会場では縮約版をパネルで展示することといたしました。

2023 年 3 月 31 日

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター長 和田博文

立命館大学加藤周一現代思想研究センター長 加國尚志